

注 意

本作品は『魔法少女リリカルなのは』と『魔法少女まどかマジカ』のクロ
スオーバー作品です。

クロスオーバーにあたり、双方の原作のストーリー・設定等を見直し・改変
を行うなど、筆者にとって都合のよい解釈をしております。

以上の点をご了承いただいたうえで、お読みください。

「——です。お忘れ物がないうよう、ご注意ください」

車掌のアナウンスが車内に響き渡ると同時に、慣性力が働いた。

横で居眠りしていたフェイトがなのはに寄り掛かる。このままずっとこうしていたという気持ちになるも、なのはは残念そうな顔で彼女の体を軽く揺すった。

「フェイトちゃん、起きて」

はっとしたように彼女は目を覚ました。なのはに寄り掛かって寝ていたことを認識すると、顔を赤らめつつも、

「あ、ごめんね。——もう目的地？」

「うん」

なのはは頷き、窓の外に目を遣る。景色が流れていく速度は大分ゆっくりになった。レールの継ぎ目を渡る音の間隔がだんだんと伸びていく。

そして、さらに速度を落としながら列車は駅に入線していく。

二人は席を立った。

彼女らと同じように降りる人はたくさんいた。

乱暴なブレーキと耳障りな摩擦音とともに、列車は停まった。ドアが静かに開き、二人は降車客の波に押されるようにしてホームに降り立つ。

(大きい……)

プラットホーム全体を覆う天蓋は、二、三階建てのビルがすっぱりと入るほどの高さであった。ガラスと鉄骨で組み合わさり、穏やかな陽光がホームに降り注ぐようになっていく。ごみごみとした車内の圧迫感と、その開放感の落差に二人は戸惑いを覚えた。

二人は人の波に従うようにして外に出た。

神々がいる天を目指すようにして、たくさんの高層ビルが建ち並んでいる、あるいは建設中であった。なのは達の目の前にも、様々な機材が甲高く小気味良い音——ある種のヒステリーを想像させる——を立てながら、ビルの建設が進められている。

自分らの住んでいる海鳴と比べ、さらに活気に溢れている。元はのんびりとした地方都市に過ぎないこの街は昇竜を想像させる発展を実現させた。その昇竜の恩恵に与ろうと、たくさんの人が流入している。しかし、すぐ郊外に行けば、豊かな自然が残る街でもあった。

もちろん、二人はここに観光しに来たわけでもないし、遊びに来たわけでもない。

「本当にここなのかなあ」

なのはが小首を傾げる。

「うん、間違いないよ。——見滝原。ここで複数の大きな魔力反応が確認された」

フェイトは目を細めながら応じた。仰ぎ見ると、蒼穹が広がっている。この空を翔び廻るのはさぞ楽しいだろうと思わせるほどの蒼穹である。

しかし、彼女は言いようのない不安を覚えた。翔び廻りたい。でも、それを躊躇ためらわせる何かがあるようにも思えた。

二人は繁華街を練り歩いた。大都市の繁華街と比べひけを取らない賑わいだ。

事の発端は三日前だ。突如として、魔力反応が確認されたのである。

魔法文化のないこの世界で、このような魔力反応が確認されるということは、すなわち異常事態を意味する。しかし、反応が確認されただけで詳細はよくわからない。海鳴から比較的遠い地域の出来事であるから、クロノはフェイトとなのはの二人を送り込んだのだ。課せられた任務は、係る事態の調査と解決だ。おそらくは複数の魔導師が衝突している。あるいはロストロギアが関係しているのが大まかな見方である。

二人は人気のない路地裏に入った。そこでホロディスプレイを立ち上げ、データを収集

する。今のところ、正常である。異常を知らせる情報は一つも入っていない。

「うーん、どこから見ても正常だよね」

なのはが困った顔で言う。

「そうだね」

フェイトも困り顔だ。

単なる勘違いではないのか。そのような考えが二人の頭の中を過ぎった。

そのときだ。

『何か異常です』

突如として、レイジングハートが異常を告げた。時を同じくバルディッシュも異常を知らせる。二人の表情はにわかには強張ったものとなる。

その言葉につられて、警戒をするかのように辺りを見廻す。だが、変なものは見当たらない。

「一体、何？」

なのはが恐る恐る尋ねた。

『詳しいことはわかりませんが、何か周囲の魔力場が変に揺らいでいるように思います』
二人はホロディスプレイに注視した。それに映し出されるデータは全くの出鱈目となっている。

なのはとフェイトはお互いの視線を交叉させ、軽く頷いた。

いつでも戦闘に入れる態勢でゆつくりと路地裏を進んだ。何の変哲のない繁華街の路地裏だ。しかし、奥に進むにつれて、彼女らも言いようのない、拭いきれない違和感を覚えた。

フェイトは思わず胸震いした。心臓が早鐘のように鳴っている。彼女は隣のなのはの見遣る、なのははつきりとした緊張に満ちたる顔であった。

フェイトはなのはの手を握ると、彼女も強く握り返してくれた。二人とも言いようのない雰囲気、得体の知れない恐怖を覚えているのである。今、握っている手を離したら、そのまま自分が異界へと行ってしまおうのではないかという奔放な思いに囚われる。

「気味が悪いね」

フェイトが独語するかのように言った瞬間だ。

刹那、眼前の景色がぐにやりと歪んだ。光線が強力な重力源で曲がったような光景であった。歪んだ景色のまま、ガラスが割れるように世界が崩れ落ちる。

経験したことのない恐怖のあまりに、二人は目を閉じて強く抱き合った。どれくらいの時間が経っただろうか。二人は恐る恐る目を開け、息を呑んだ。

次元空間を思わせるような空であった。黒を基調とした空は常に揺れ動いていた。そして、自分達が立っていた路地は砂糖を思わせる白さを持つ石が敷き詰められた道になって

いた。

「何なの、ここ……」

なのはが呻くように言った。一方、フェイトは喉が潰されたかのように言葉が出ない。最も奔放な夢でさえ見られない光景である。

そして、なのはとフェイトはようやく冷静さを取り戻した。まずは外部と通信ができるかであった。しかし、デイスプレイを立ち上げるも、無機質な砂嵐が映し出されるだけである。次に念話を試すも誰も反応しない。

つまりは二人は結界内部のような空間に入り込んでしまったのだ。

この空間が今回の謎の魔力反応に関わっているのは間違いない。二人はそう確信した。

「レイジングハート！」

「お願い、バルデイツシュ」

それぞれのデバイスの名を呼び、バリアジャケットに身を包み込む。

とにかく、今はここから出る手段を見つけるべきであった。

この道は一本道だ。二人は道なりに進んだ。ゆっくりとした歩調で、時折周囲を見廻しながら進んでいく。一体、何がしているのだろうか。未知との遭遇の恐怖を孕みながら、二人はそれぞれの愛杖と愛斧をしっかりと握り締めながら進んでいく。

しばらく進むと広場に出た。どうやら、この空間はここで行き止まりのようだ。

「ここで行き止まりかな？」

フェイトが不安で若干震えた声で言う。

「わからない。出口みたいなのは——」

なのはの言葉を遮るようにして、耳を聳^{ろう}するほどの轟音が響いた。そして、間髪を入れず頭上から何かが降ってきた。

二人は飛び跳ねるようにして、そこから退く。

降ってきたのは異形であった。それは明らかに人ではない。不定形のような、常に形が一定でなかった。何より、最悪なのはその姿形である。無邪気な子供がクレヨンで適当に描いたような少女の形をした異形である。

「お話はできるかな？」

なのはがそつと言った。

「……そういう態度じゃなさそうだよ」

フェイトが頭を振って言う。

その少女の形態をした異形は、はっきりとした敵意を二人に向けてくる。はなから話し合う気積りはなさそうだ。

先に動いたのは異形であった。

——来る！ 二人が攻撃に応じようとした瞬間であった。

「はあああああ！」

開戦を妨害するかのような絶叫。二人と異形がそれにつられるように見上げる。

光が走った。その光は異形を両断するかのようには走ったのである。

数瞬の後、その異形は真つ二つになった。ぞつと、身の毛がよだつような悲鳴が広場に響き渡る。

しかし、その悲鳴は断末魔の悲鳴ではなかった。その異形はすぐに元通りとなり、立ち上がる。

「しぶといなあ」

その光を走らせた張本人は残念そうに言った。その少女の年齢はなのは達と同じくらいだろう。青く短く切り揃えた髪。白いマントと青と白のコントラストが美しい服に身を包んでいる。そして、何より美しい光沢を放つ刀を携えていた。

呆然としたなのは達の存在にようやく気がついた、その少女は笑みを浮かべた。彼女は活発さを感じさせる声で、

「怖かったですよ？ でも、もう大丈夫——」

そして、不自然に言葉を途切らせたかと思うと、その笑みを引つ込めて表情を強張らせた。その張り詰めた空気を掻き乱すかのように、ある意味場違いにも思えるのんびりとした。

その張り詰めた空気を掻き乱すかのように、ある意味場違いにも思えるのんびりとした

声が響く。

「さやかちゃん、待ってってばあ」

小走りでもう一人の少女がやってきた。さやかと呼ばれた少女と違い、中学校の制服を纏っている。おとなしいという印象を感じさせる少女であった。

「まどか！ 下がってて！」

さやかは険とした声色で叫んだ。まどかと呼ばれた少女は一瞬呆気に囚われるも、なのはとフェイトの存在を認め、はっきりとした驚愕の表情を浮かべた。

場は敵意に満ち溢れていた。

さやかは警戒の色を褪せらせる様子はどこにもなく、フェイト達に切先を向けている。剣先を向けられた彼女達もそれぞれの杖と斧をさやかに向けた。

そのような中、まどかは未だ慌てたような表情でさやかとフェイト達に交互に視線を送った。

しかし、さやかはにわかには視線を異形——使い魔に向けた。使い魔は未だ存命である。それははつきりとした憎悪に満ちた視線で、さやかを射抜いた。

彼女の動きにつられるようにして、なのは達も使い魔に注目する。

刹那、それは眼前から消えた。

突然の消滅に、さやかとなのはは慌てて廻りを見渡した。

「消えた!？」

いや、それは消えたのではない。

フェイトが天を仰ぎ見て、

「上！」

そう叫びつるに、さやかは即座に上を向いた。

使い魔が体を広げながら、さやかに向かって降ってきた。距離は既に近い。

彼女は臆した素振りを見せることなく跳躍した。

剣を避雷針のごとく突き立てると、数瞬の後、乾いた音が響いた。

剣はしっかりと使い魔の体を貫いた。刃先をどす黒い体液が伝わり、美樹さやかの白い手を汚していく。

血のようで血でない。

しかし、生温さは血液を思わせるものであり、彼女は思わず胸震いした。

使い魔は二、三回痙攣けいれんしたかと思うと、体全体にひびが入り始めた。乾いた漆喰が剝がれ落ちていく光景と同じように、体全体が崩壊していく。やがて、それは砂のように飛び散った。

変化はそれに留まらない。

今度は黒き天に亀裂が走り始めた。

亀裂は天だけでなく、地面や壁面にも凄まじい勢いで縦横無尽に走り始める。そして、音もなく世界が崩れた。

フエイトとなのは再び眩暈めまいを覚えた。

一瞬、眼前が暗くなったと思うと、世界は平常に戻っていた。

つい数分前までなのは達がいた、繁華街の路地裏である。

なのはは恐る恐る空を見た。

建ち並ぶビルの隙間から、群青色に塗り潰されている空が窺えた。

本当に元の世界なのだろうか？

精巧に作られた、元の世界に見せかけた異世界なのだろうか。

——なのはは言いようのない不安を孕みながらも、さやかに視線を向けた。

彼女は相変わらぬぞつとするような冷たい視線でなのはらを射抜いている。

「あっ」

なのはは戸惑いながら、声を搾り出すように、

「えっと、さやかさんでしたっけ」

そして、ぎこちない笑顔を彼女に向ける。

さやかは一瞬眉間に皺を寄せた。自分はいつ名乗っただろうかと記憶を弄って、程なく

まどかが自分の名前を大きな声で呼んだことを思い出した。

さやかは無言を貫いた。

まどかはおどおどとした調子で一歩進み出て、なのはと同様にぎこちない笑みを浮かべ

ながらも、

「えっと、私は鹿目まどか、まどかだよ」

と弱々しい調子で名乗った。

「私は高町なのは、こっちはフェイト——」

「いい！」

さやかが険とした調子でなのはの言葉を遮ったかと思うと、なのは達に剣を向けた。彼女ははつきりとした憎悪を込めた視線で、

「あんた達も、魔法少女か……」

そして、一歩前に出た。その凄まじい剣幕にフェイトもなのはも思わずたじろいだ。

「とっとと消えなさい」

「そんな、なんで！……」

なのはが非難めいた調子を込めて言うと、

「うるさい！ あんたもどうせ同じだろ」

さやかは一気に剣を突き出した、鋭い刃がなのはの左肩を掠めようとするも、

『Protection!』

レイジングハートの自動防御。それが刃をすんでのところまで止める。

さやかとしても、ちょっととした威嚇のつもりであった。

「なのは！」

その威嚇に激昂したるフェイトが目にも止まらぬ速さで動く。バルディッシュで容赦な

くさやかかの鳩尾をついた。

彼女らしくない力任せの攻撃。ただただ、怒りを込めただけの重い攻撃。

呻き声を上げながらさやかは二、三メートル吹っ飛び、地面を派手に転がる。

「さやかちゃん！」

まどかが悲鳴じみた声を上げつれど、さやかはすぐに立ち上がる。瞳は強烈なまでの怒りが宿っていた。

『フェイトちゃん、落ち着いて』

念話でなのはがフェイトを諫める。彼女は首をわずかに縦に振った。確かに冷静さを失った行動だと自らを戒めながら、さやかを見据える。

『ごめん。……でも、向こうは大人しく引き下がりにないね』

申し訳なさそうにフェイトは言った。

なのはは困惑の色を浮かべながら、視線を泳がせた。まどかと視線が交叉すると、まどかも心配の色を強めた。

意図を察したのか、まどかはさやかに見遣った。

フェイトの周囲に五個の光弾が発生する。フォトンランサー。まずは牽制だ。一、二、三個の光弾を叩き込む。

爆碎音が路地に反響した。空気を震わせながら、白煙が視界を悪化せしめた。



さやかは声にならない悲鳴を上げた。再び吹っ飛んだ音と、もう一人の少女の安否を氣遣う悲鳴がこだまする。

しまったとフェイトは思った。戦闘能力はそれほど高くはないらしい。自分としては牽制のつもりである。普通の魔導師なら、シールドを張るなり、避けるなりはしてくるだろう。

白煙の中から、剣を突き出しながら、さやかが突っ込んできた。悲壮な決意を湛えた目で、フェイトに憚ることなく突っ込んでくる。

金属と金属のぶつかりあう音。

攻撃一つひとつは荒削りだ。力任せな部分があった。隙も大きい。さやかが大きく振り被ったところで、フェイトはバルディッシュの刃先で剣を跳ね除けさせた。相手の胴体がから空きとなる。

勝負は決した。

バルディッシュの光刃がさやかの喉元に突きつけられる。

彼女は一瞬恐怖で顔を引きつらせるも、すぐに烈しい怒りを込めた視線で、フェイトをねめつけた。

「ここで終わりにしましょうか」

フェイトは落ち着き払って言った。

——落ち着いた声で言う。これで相手に自分が優位であることを強調させる効果もあった。

逃げ出したくなるような長い沈黙の後、さやかは首を振りながら、
「い、嫌だ」

と消え入るような声で言う。フェイトはそれに応じることなく、

「まずは剣を下ろしてください」

あくまでも投降を促す。

「そ、そうだよ、さやかちゃん。もう止めにしようよ」

まどかが懇願するかのように彼女に言った。

彼女はしばしの間まどかを見遣ると、観念したかのように恐る恐る剣を下ろし始めた。

投降の意思を表したことに、フェイトとなのはの顔が一瞬緩む。

まずは何を訊こうか。フェイトがあれこれ思考を張り巡らしていると、突然違和感が襲った。

その違和感が何であるかを認識したとき、感情を押し殺した冷たい声が耳元で囁かれた。
「止めにするのはあなたもよ」

冷たい感触が背中を襲った。カチャリとした乾いた音が響いた。撃鉄だ。背中越しとはいえ、それが銃らしいということは容易にわかった。

驚愕に包まれながら、フェイトは首を廻した。

艶やかな長い黒髪が風になびいている。その目は怖ろしいまでに鋭く冷たい。幾度のも修羅場を潜り抜けた冷酷さを備えている目であった。そして、自分の背中に突きつけられているものが、やはり拳銃であることを認識するも、フェイトとしてはどうしようもなかった。

いつ現れたのか。いつ背中を取られたのか。

様々な疑問が涌いては消えた。

フェイトはさつとさやかとまどかに視線を配った。二人とも警戒の視線を込めている。どうも仲間ではないようだ。

ようやく我に返ったなのは動き出そうとするも、なのはも一瞬にして、銃口が向けられた。左手の拳銃でフェイトを、右手の拳銃でなのはが狙われている格好となった。

誰も動けなかった。いや、唯一動けるまどかは丸腰であるから、実質的に動けない。

「あ、あなたは?……」

フェイトは呻くように名を訊く。

「あけみ暁美ほむら——名前はいつでもいいわね」

彼女は沈黙した後、

「さやかもまどかもここから退いてちょうだい」

ほむらと名乗った少女に促された二人は洪々といった形で路地の奥へと消えていった。二人の退去を確認すると、ほむらはゆっくりと拳銃を下ろして、

「あなた達は新参かしら？」

ほむらの質問に二人とも沈黙を守る。彼女は目を細めて、

「まあ、どうでもいいわね。あなた達はこの街から早々に立ち去ることね」

そう言って、ほむらは路地の奥に消えて行こうとする。

「ま、待って。えっと、どういうことですか？」

なのはが慌てて呼び止める。

ほむらは立ち止まり、顔だけをなのはに向ける。

鋭く突き刺すような視線でなのはを射抜きながら、

「答える義務はないわ。早々に立ち去りなさい。命が惜しくばね」

そして、彼女は幻影のように消えた。

静寂が訪れた。表通りから喧騒がわずかに聞こえてくる。

二人は互いに顔を見合らし、バリアジャケットを解除した。

茜色の空を背景に工場街の無骨なシルエットが揺らぎ、都心に林立する高層ビルのミラ

「ガラスが西日を乱反射させていた。

さやかが先導する形でまどかと歩いていった。さやかは傍から見ると不機嫌な面持ちであった。従うまどかは未だに困り顔である。

彼女らはその後も魔女退治に従事していた。しかし、昼の一件以降、魔女とは出くわしていない。

「ねえ、さやかちゃん、昼間の子達って……」

「どうせ、同じだよ」

「そう……かな？」

まどかは恐る恐る言った。彼女の年齢はどれくらいだろうか。自分達と同年齢だろうか。ただし、その割には大人びているな、という感覚を抱いたのもまた事実であった。

さやかは唐突に足を止めた。そして、振り向いて、押し通す口調で言った。

「いい？ マミさんみたいな魔法少女なんか、滅多にいないんだよ。油断しちゃいけない」
ひとしきり、「マミさん」という言葉に強調した。

あの一件以降、さやかは徹底的というほどに他の魔法少女を信用していない。いわんや全てが敵であった。

何度似たようなやり取りを繰り返したとか。そして、まどかもそう言われるたびに反論できないのである。

「さあ、とつとと行くよ。日が沈むまでにもう一体くらい仕留めたい。——ママさんがいない今、私がこの街を守らなきゃいけないんだ……」

「さやかちゃん……」

さやかはさつさと歩き出した。

東の空は薄紫色に染まりつつあった。冷たい春の夕風が、歩道橋を撫でるようにして吹いた。

『——二人の魔導師？』

ホロデイスプレイ越しにクロノはオウム返しのように訊いた。

「うん、一人はさやかさんという方、もう一人はほむらさんという方」

なのはがそう言うと、彼女らの写真が新しいデイスプレイとして立ち上がる。

『その上、謎の異空間に異形ねえ』

彼は独語した。

「とにかく、その異空間と二人の魔法少女が今回の事件の鍵であることに間違いはないと思う」

フェイトが言うと、クロノとなのはは大きく頷いた。

『今後も調査を続けてくれ。連絡は欠かさないように』

「了解」

『くれぐれも気をつけて』

ディスプレイは霧散した。

太陽はすっかりと地平線の向こうに沈んだ。逃げ隠れた太陽の代わりを少しでも努めようと、街明かりが煌いてる。

「どう思う？」

フェイトが訊いた。

「悪そうな人には見えないんだけどなあ」

なのはが遠い目で言った。どうも向こうはこちらが敵であると完全に誤解している。そのうえ、さやかと名乗った少女は聞く耳を全く持っていないようだ。

「さやかさんよりは、まだかさんのほうとお話ができそうだよね」

「そうだね。彼女も魔導師かな？」

彼女は終始制服であった。魔導師なのかどうかもわからない。

二人の共通の疑問は三つあった。異空間と異形。二人の少女。そして、黒髪の少女であった。

特に黒髪の少女——暁美ほむらの警告は理解するに能わず。一体、どういうことだろう

か。今度逢うときは命を取るということなのだろうか。それとも、単純に危険が迫っているから逃げろという警告なのだろうか。どちらの意味にも解釈できた。

フェイトとなのはは眼下の街並みを眺める。

高層ビルの屋上からの眺めは格別だ。煌めくイルミネーションは無造作に散りばめた色とりどりの宝石が輝いているようであった。海の方を眺めると、黒々とした海上を光点がいくつも動いている。船舶だ。二十四時間、時間を選ぶことなく、船舶が入港しているのである。

繁栄を謳歌したる街並みを見て、言いようのない底知れぬ不安を二人は覚えた。

翌日の放課後、二人は昨日の現場に赴いた。謎が山積しているが、ひとまずは異空間とそこに巢食う異形についての調査を行うことにしたのである。

昨日と変わらぬ繁華街の路地裏。不自然なほど人気のない路地裏であった。

モニタを立ち上げ、空間の調査をしても、妙な反応はどこにも見られなかった。

ただ、昨日も正常値が示していたところ、突如として異常値を示したのである。その場に留まり、ディスプレイを凝視し続けるも、値に一向に変化は見られなかった。

「何もないね……」

フェイトが独語した。

「そうだね……」

なのはが首を傾げて言う。

フェイトは迷った。このまま居続けて、異常が現れるのを待つべきか。それとも、さっさと移動すべきか。

ここに留まっても、昨日のように異空間が発生するとは限らない。柳の下のどじょうである。

さんざん迷った末、二人は移動することにした。特に目的地はない。デバイス達にサーチを続けさせたまま、彼女らは熱気が渦巻く繁華街を練り歩く。

しかし、異常が検出されることなく、繁華街の外れまで来てしまった。

「どうする？ フェイトちゃん」

「地道に歩き廻るしかないと思う」

なのはは首を縦に振った。

彼女らが繁華街から出ようとしたときだ。

『異常を感じしました』

バルディッシュユが唐突に言った。

「どこ!？」

『確証は持てないのですが、およそ三百ヤード先の廃墟ビルです』
彼らしかぬ曖昧な発言。

「レイジングハート?」

なのは相棒に尋ねた。

『同じくあの廃墟ビルに異常があるようです』

二人は顔を見合らし、脱兎のごとく走り出した。血相を変えて、突然走り出した二人の少女に廻りの歩行者は訝りながら避けていく。

向かった先は四階建ての雑居ビルであった。

相当老朽化が進んでいるのだろう。外壁を覆うコンクリートはひどく剝離しており、赤く錆びた鉄筋が剥き出しになっていた。

そして、間もなく解体が行われるのか。大手建設会社による解体工事を報せる標識とフェンスで囲まれていた。

周囲に人気がないことを確認すると、フェイト達は瞬く間にバリアジャケットに身を包みこむ。一気に跳躍し侵入を阻むためのフェンスを軽々と乗り越え、敷地内に入る。

真つ黒な入り口がぼっかりと鯨のように口をあけている。

彼女らは逡巡するも、意を決して、ビルに入り込んだ。役目を果たさなくなった自動扉を潜り抜けた瞬間、二人は異世界に入り込んだ感覚を覚えた。

初めての感覚ではなかった。それは広域結界内に組み込まれた感覚と瓜二つである。廢ビル内の空気は埃とかび臭く、瘴気のように淀みたるに、今にも窒息してしまいそうであった。

中は極普通の雑居ビルであるように見えた。

しかし、ホロデイスプレイを立ち上げると、全ての測定値が計測不能となつてることが、この空間の異常性を示していた。

歩くたびに、音がほの暗い廊下に不気味に反響した。部屋を一つひとつ、丹念に調査していく。ドアを開けると錆付いた蝶番ちようつがいから、軋んだ音が耳朶に入った。

部屋を覗くたびに怖ろしいまでの異形が飛び出してくるような恐怖を覚える。ロストロギアが眠っている遺跡の探査とは違う異種の恐怖が、二人の心を容赦なく蝕んでいく。

一階、二階……と調査を続けていく。ここまでは空振りであった。どの部屋も何も無い。そして、最上階の最後の部屋を探索しようとしたときだ。

そのこのドアのたて付けだけは異常に悪かった。

「仕方がない……」

バルディッシュのザンバーモードでドアを壊し無理矢理入り込む。建造物の損壊であるが、どうせ取り壊されるのだから、問題はないだろうという判断だ。

部屋のちょうど中央に黒点が浮かんでいた。境界ははっきりしておらず、また、心臓のように規則的に鼓動しているようにも見えた。

二人は息を呑んだ。

この異常な空間の元凶であることに間違いない。

遠巻きにしばしの間、それを観察するも何も動きはなかった。

指示を仰ぐべきか。それとも、このまま独断で調査を続行するか。迷っているうちに、昨日のような強烈な違和感が二人を襲った。

平衡感覚がいったん消失し、目の前がぐるぐると廻った。

手品師が鮮やかに物体を入れ替えるように、一瞬のうちに世界が入れ替わってしまった。空は薄紫色で塗り固められ、目の前に奇抜な色彩の凱旋門が聳えている。空気は有毒ガスが充満しているかのように息苦しい。どうも、この空気には慣れない。

ホロディスプレイを念のために立ち上げるも、砂嵐がただただ映し出されるだけである。なのはとフェイトは諦めて、ゆっくりと歩み始めた。

その門の色彩はじっと見つめていると目が痛くなりそうであった。原色をふんだんに使い、幼児が適当に筆を走らせたのではかないかと疑うような色使いである。

また、門の大きさも不定であった。あるときは摩天楼を思わせるように高く見えたかと思うと、あるときは自分の背丈ほどの高さしか見えないときもあった。

この空間にずっといると、自分の感覚が疑りたくなってくる。

心臓の高鳴りを覚えながら、凱旋門の下を潜ると、にわかに馬蹄が地面をたたく音が響き始めた。

二人は身構え、迎撃態勢をとる。

前方から馬が猛烈な勢いで走ってきた。灰色の馬だ。しかし、顔はのっぺりとしている。馬は甲高い鳴き声を上げながら、スピードを緩めることなく、猛然と突っ込んでくる。何とまあ考えのない相手なのだろう。二人は同じことを思う。

なのははレイジングハートの照準をしっかりとその馬に定めた。一方のフェイトは、周りに十発の帯電した槍を思わせる光弾を生成した。

そして、同時になのははデイバインバスターを放ち、フェイトはフォトンランサーを放った。

なのはの放ったバスターより早く、機動力のあるフォトンランサーはその馬に直撃し、もうもうと白煙が立ち込め、辺りの視界を悪いものとした。

耳を塞ぎたくなるほどの悲鳴が響くも、その白煙の中を馬は変わらず走り続けた。しかし、すぐに桜色の光条がその白煙を薙ぎ払いながら、その騎馬に直撃した。

その光条は瞬く間に馬を跡形もなく消滅させた。文字通り、後には何も残らなかった。

「ふう」

なのはとフェイトは同時に溜息をついた。見た目は怖ろしいが、それほど手強い相手ではないようだ。

「気味が悪い……」

フェイトは囁くように言った。まだ、魔獣と戦うほうが気分的にも楽である。

「行こう、フェイトちゃん」

そのようなフェイトをよそに、なのはは歩き始めた。

少しの間歩くも、何も異常はなかった。もつとも、この空間自体が異常の塊であるが。先程のような怪物が現れるのだろうか？ どこかに出口があるのだろうか？

様々な不安や憶測が駆け巡り、二人の頭を飽和させつつあった。

ちようど、思考が飽和点に達したとき、空間が動き始めた。

——来る！

二人は再び身構えた。

気付けば草原を思わせるような空間にいた。周囲三六〇度、見渡す限りの草原が広がっている。もつとも、肝心の草は灰色で塗られた、まるで学芸会の劇に出てくるような、ちやちなものである。

再び、馬蹄が地面を烈しくたたき音が響いた。その音が方向を凝視していると、黒色の馬が疾走してきた。先程は何も乗せていなかったが、今度は騎士を乗せていた。正確に言うところの赤いシルエットだ。左手に剣、右手に盾という格好であり、のっぺりとした顔には二つの赤い眼がぎらぎらと輝いている。

その騎士が払った剣先から衝撃波が発せられ、まっすぐと二人に向かってきた。

二人はやすやすとそれをバリアで防ぐ。

両名は互いに顔を見合わせ、軽く頷いた。

なのははすぐに浮遊し、敵から距離を取る。フェイトはバルディッシュを大きく振り被りながら、その騎士に突っ込んでいく。

騎士は盾の前に突き出し、剣を振りかぶった。

両者ともに各々の剣と斧を振り下ろそうとしたときだ。

「ファイヤー！」

フェイトは直前にフォトンランサーを一発だけ生成し、即座にその騎士に当てた。

至近距離からの光弾にその騎士は避ける間もない。光弾は大きく爆ぜた。騎士が怯んだところで、フェイトは容赦なくバルディッシュを振り下ろした。光の線条が騎士の体に斜めに走った。

痛みに耐え切れなかったのか、騎士が体を大きく仰け反らせたところで、フェイトはそ

のまま燕返しを行い、騎士の攻撃範囲から離脱するさいに三、四発のフォトンランサーを見舞う。

爆碎音と息ができなくなるほどの白煙がもうもうと舞い上がったところに、上空から桜色の閃光がフェイトの脇を駆け抜けた。

先程のフォトンランサーを上廻るほどの、轟音が空気を震わす。

なのはによるデイバインバスターだ。

フェイトがクロスレンジで応戦し、ある程度の間をつくったところで、なのはがロングレンジから砲撃を叩き込む。互いの得意分野をそれぞれ熟知したうえでの連携である。

白煙が晴れると、そこには何も残っていなかった。

なのはの砲撃で跡形もなく滅したのである。

その瞬間、眼前の景色が揺らいだ。

外の喧騒が耳朶についた。振り返ると、煤けた窓の外からは、穏やかな春の陽射しに包まれた繁華街が広がっている。

二人は思わず顔を綻ばせた。

現実世界に戻ったのである。どうやら、謎の異空間に住まう主的なものを倒せば元の世に帰れるようである。

安堵の気持ちを胸に仕舞いこみ、ここから立ち去ろうとしたときだ。

「なのは、待って」

フェイトが険しい表情で言った。

「どうしたの？」

となのはが首を傾げながら訊いた。

「これ、何かな？」

フェイトが指で示した先、先程まで黒点が浮かんでいた床に、球状の宝石のようなものが転がっていた。黒く濁っているそれは、素直に綺麗だとは言えない。

フェイトは恐る恐る手に取り、なのはの前に差し出す。

差し込む陽光で、その宝石は鈍く黒光りしたようにも錯覚した。

二人はまだ知らなかった。それこそ、魔女の卵たるグリーンフィードと呼ばれているということを。

「君達凄いなね！ どこでそんな力を手に入れたんだい？」

場に不釣り合いな声が響いた。にわかには声が出た方向に視線を注ぐと、白い垂れ耳が特徴的な生物が窓際に座っていた。